

「宗教と社会」学会 第15回学術大会

日程表

2007年6月9日(土)・10日(日)
駒澤大学(駒沢キャンパス)

発表会場：駒澤大学(駒沢キャンパス)1号館

受付	1号館2階廊下ロビー
本部・クローク・休憩所	1号館301
書籍販売	1号館2階廊下ロビー、3階廊下ロビー
昼食会場(10日)	1号館204

その他の会場

- 委員会(本部棟 5階 5-3、5-4)
- 懇親会(大学会館ホール食堂2階)
- 禅文化歴史博物館

日程

6月9日(土)

11:30～	受付
10:30～	常任委員会(本部棟5階 5-3)
12:30～17:55	個人発表(1号館202、203、204)
18:00～18:40	総会(1号館202)
19:00～20:30	懇親会(大学会館ホール食堂2階)

6月10日(日)

9:00～	受付
9:30～12:30	テーマ・セッション(1号館202、203)
12:30～13:20	昼食(1号館204)
12:30～13:20	常任委員会(本部棟5階 5-3)
12:30～13:20	編集委員会(本部棟5階 5-4)
13:20～13:50	禅文化歴史博物館見学
14:00～17:00	テーマ・セッション(1号館202、203)

発表題目と発題者 個人発表（6月9日・土）

	A会場（1-202）	B会場（1-203）
12:30- 13:20	岡安裕介（京都大学大学院人間・環境学研究科） 日本という社会空間の拡張論理	古澤健太郎（同志社大学神学研究科） 沖縄キリスト教と民間の宗教的伝統 — 戦前戦後の資料を中心に —
13:25- 14:15	上本雄一郎（京都大学大学院） 出口王仁三郎と機織りのモチーフ	石森大知（日本学術振興会） 太平洋における独立教会とカーゴカルトの比較研究 — ソロモン諸島クリスチャン・フェローシップ教会の形成と展開 —
14:20- 15:10	大澤広嗣（國學院大學日本文化研究所） 渡辺樸雄の南方調査 — 馬來軍政監部調査部における —	松川恭子（奈良大学社会学部） 神のことばの現地語化とローカリティの生産 — インド・ゴアのキリスト教会を事例に —
15:15- 16:05	小林康正（京都文教大学） 姓名学の誕生 — 産業革命期における異端的実践と「主体」の形成 —	河西瑛里子（京都大学大学院人間・環境学研究科） 日々をスピリチュアルに生きるということ — 英国の聖地、グラストンベリーにおけるヒーリングの実践と女神運動を事例として —
16:10- 17:00	葛西賢太（宗教情報センター） 禁酒運動の宗教思想と近代的自己 — 日本における事例 —	神本秀爾（京都大学大学院人間・環境学研究科） ラスタファリ運動のグローバル化とジャマイカのラスタ — 生業の変化を中心に —
17:05- 17:55		原田恭介（同志社大学神学研究科） イスラーム解放党のカリフ国家樹立闘争と現代中央アジア

C会場 (1-204)	
12:30- 13:20	真鍋一史 (関西学院大学) 国際比較の視座からの religiosity — 日本独自の measures の探究 —
13:25- 14:15	松島公望 (東京学芸大学大学院) ホーリネス系教会に関わる日本人クリスチャンの「宗教性」発達モデルの構成 — 宗教性発達の心理学的研究 —
14:20- 15:10	デラコルダ・ティンカ (筑波大学人文社会科学研究科) 日本現代都市社会における民衆宗教性と消費行為 — とげぬき地蔵の事例 —
15:15- 16:05	尾上正人 (奈良大学) レヴィ-ストロースと一神教 — 西洋社会の神話なき「構造」? —
16:10- 17:00	林貴啓 (立命館大学) 「隠喩としての宗教」序説
17:05- 17:55	對馬路人 (関西学院大学社会学部) コーディネート之力 — 世俗的 (非宗派的) 宗教コーディネーターの台頭と現代日本の宗教変動 —

プログラム編集の関係上、発表者の身分ならびに詳細な連絡先につきましては、記載を省略いたしました。

発表題目と発題者 テーマ・セッション（6月10日・日）

	A会場（1-202）	B会場（1-203）
9:30- 12:30	宗教社会学における調査研究の課題と実践 — 秋庭裕・川端亮『霊能のリアリティへ』 (2004)、芳賀学・菊池裕生『仏のまなざし、読 みかえられる自己』(2006) 書評セッション —	映像宗教学の射程
14:00- 17:00	ツーリズム・聖地・巡礼	仏教ルネッサンスの向こう側 — ラディカル な現代仏教批判 —

◆ 宗教社会学における調査研究の課題と実践 — 秋庭裕・川端亮『霊能のリアリティへ』(2004)、 芳賀学・菊池裕生『仏のまなざし、読みかえられる自己』(2006) 書評セッション —

[A会場 1-202 9:30~12:30]

司会者	樫尾直樹（慶應義塾大学） 弓山達也（大正大学）
コーディネーター	黒崎浩行（国学院大学）
自著紹介	秋庭裕（大阪府立大学） 川端亮（大阪大学） 芳賀学（上智大学） 菊池裕生（盛岡医療福祉専門学校）
評者	伊藤雅之（愛知学院大学） 櫻井義秀（北海道大学） 塚田穂高（東京大学大学院）

◆ ツーリズム・聖地・巡礼

[A会場 1-202 14:00~17:00]

司会者	山中弘（筑波大学）
コーディネーター	山中弘（筑波大学）
発表者	今井信治（筑波大学大学院） 山中弘（筑波大学） 浅川泰宏（明治大学） 寺戸淳子（専修大学） 真鍋祐子（東京大学）
コメンテーター	橋本和也（京都文教大学）

◆ 映像宗教学の射程

[B会場 1-203 9:30~12:30]

コーディネーター	新井一寛（大阪市立大学都市文化研究センター）
発表者	岩谷洋史（神戸学院大学 地域研究センター） 南出和余（京都大学地域研究統合情報センター） 新井一寛（大阪市立大学都市文化研究センター） 岩谷彩子（龍谷大学アフラシア平和開発研究センター） 小田マサノリ（中央大学）
コメンテーター	田中雅一（京都大学人文学研究所） 藤原敏史（ドキュメンタリー映像作家）

◆ 仏教ルネッサンスの向こう側 — ラディカルな現代仏教批判 —

[B会場 1-203 14:00~17:00]

司会者・企画者	川橋範子（名古屋工業大学） 熊本英人（駒澤大学）
発表者	川橋範子（名古屋工業大学） 根本治子（花園大学） 大谷栄一（南山宗教文化研究所） 熊本英人（駒澤大学）
コメンテーター	福島栄寿（札幌大谷大学） 三土修平（東京理科大学）

プログラム編集の関係上、発表者の身分ならびに詳細な連絡先につきましては、記載を省略いたしました。

●発表要旨 個人発表

A会場 1-202 教場 9日(土) 12:30-13:20

日本という社会空間の拡張論理

岡安裕介(京都大学大学院人間・環境学研究科)

「常世」と呼ばれる他界から、時を定めて村々に来訪する神がある。その「まれびと」と呼ばれる神は、呪言である「のりと」によって村々に巢食う「土地の精霊」を圧伏する。「圧伏された精霊」は村落生活を脅かさないことを誓う。「まれびと」はその呪言で「土地の精霊」を圧伏し、神の意志に従わせることで村々に幸をもたらす。

上記は折口信夫のいわゆる「まれびと論」の概要である。折口は日本人の持つ神観念を端的に表すものとして、この「まれびと論」に代表される形で己の思想を洗練していったのであるが、決してそれを狭義の「宗教」という枠には限定はしなかった。折口は自説の展開において、日本という社会空間の発生原理の究明に、その主眼を置いていたのである。

では日本という社会空間とは何か。この自明のようであり、つかみどころのない問いに対し、折口は次のような答えを出した。「この祝詞がくだると、その土地が、日本をもって呼ばれるようになるのである」と。つまり、日本と呼ばれる社会空間とは、天皇の「みこと」である「のりと」の下る範囲内といえる。祭政において天皇の「みこと」が効力を発揮すると、その社会空間は「日本」という構造に組み込まれることになる。

この「みこと」を各々の共同体へと伝達する者こそ、折口の言う「詔命伝達者(みこともち)」である。「みこともち」は「みこと」を伝達することによって、天皇の言葉を、ひいては社会の規範そのものを共同体にもたらす。

そもそも折口によれば、天皇そのものが「天つ神」の「みこと」を伝達する最高位の「みこともち」であり、その伝達をもって、「常世」である「高天原」の理想的な秩序を「現世」に引き写しているのである。そして、この「天つ神」の「みこと」を発するという資格において、天皇は「天つ神」と同等とみなされることになる。加えてここで重要なのは、この「みこともち」の資格は、上より下に及ぶということである。最初の発言者(神、あるいは天皇)から「みこと」をいただいた者が、その下の者に「みこと」を発する(伝達する)際は、最初の発言者と同等の資格を得るとみなされる。そして、この伝達は順繰りに下っていき、各々の関係性において、「みこと」を発する者は全て「みこともち」の資格を有することとなる。

このように上からの「みこと」を伝達すること、その「みこと」に従い「まつり(政・祭)ごと」をすること、上の生活、信仰様式を模倣すること、これが「神道(折口の言うところの古代神道)」の思想である。ゆえに折口は「神道」を「宗教の基礎に立つ古代生活の統一原理と見、その信仰様式がしきたりとして、後代に、道徳・芸術、あるいは広意義の生活を規定した」ものと捉えたのである。

つまり、折口は「神道」の地方への伝播が「日本」という社会空間の拡張の本質であると説いたのである。しかし、この伝達はやすやすと成し遂げられるわけではない。折口は自説の基礎に古代社会における政治的、宗教的变化を想定していた。すなわち、ある共同体が「みこともち」を受け入れるということは、かつての共同体の神から、大和朝廷の神(天つ神)に信仰を移すことであり、それが日本という社会空間の拡張に連動することになるのである。この視点が「土地の精霊」(かつての共同体の神)が「来訪神」(新たな共同体の神)に圧伏されるという冒頭の「まれびと論」の根幹である。古い規範を打ち捨てた上での新たな規範の確立、またそれに対する反抗や妥協—折口の描き出した民俗世界は独自の論理に従い色鮮やかな様相を見せる。

本発表では折口のテキストに従いながら、そこに一貫する論理構造を考察していきたい。

出口王仁三郎と機織りのモチーフ

上本雄一郎(京都大学大学院)

本発表は出口王仁三郎(1871-1948)を扱う。彼の思想は、近代日本を生きた民衆に果たしてどのように受容されてきたのであろうか。この点が明らかにされれば、当時の民衆にとっての「生きられた生活世界」もまた明らかになり、それにより、従来にはまだなされたことのない視座から、出口王仁三郎によって指導された大本教の一側面を描き出すことができるのではあるまいか。これが、本発表の出発点をなす視座である。

かつて歴史家の上田正昭氏は、「近代宗教としての大本教」(『思想の科学』1965年9月号)において、大本教の運動にはナショナルな側面とインターナショナルな側面があると指摘した。だが残念ながらそれ以降の大本教研究史においては、思想史的な研究を除いて、上田氏が行なったようなアプローチは深められてこなかった。拙論は、二側面のうちの前者、すなわちナショナルな側面の究明を目指すものである。民衆宗教史研究に関してはこの分野の開拓者である村上重良氏や安丸良夫氏らのすぐれた先行研究があるが、しかしそれらも、大本教の運動のナショナルな側面に関してはまだ不十分なままにとどまっている。

天理教の教説におけると同じように、大本教の教説にも「立替え」あるいは「立直し」といった「大工言葉」が頻出するが、同時に、それとは別の系譜に属するものとして、「経糸」^{たていと}、「緯糸」^{よこいと}、「綾錦」、「機」、「杼(あるいは梭)^{おさ}」といった紡織関係の言葉もまた存在する。大本教発祥の地である京都府綾部市は、明治29年(1899)、当時の何鹿郡内の中小零細養蚕家を結集する形で「郡是製絲株式会社」(現在のグンゼ株式会社)が発足した地にはかならない。夫との死別の後、子沢山の家計を糸引きなどの出稼ぎで切り盛りすることを余儀なくされた大本開祖・出口なお(1837-1918)は、郡是の工場より聞えて来るサイレンの音に年若い女工たちの身の上を慮った。大本教の教説に存する紡織関係の言葉は、こうした地域的特性を背景として生まれたと考えられる。さらに、戦前期日本の対外輸出品目のなかでつねに上位に位置していたのが生糸であったこと、飛騨白川郷における合掌造りに代表される、ひときわ屋根の大きな茅葺の日本家屋が養蚕に適し、かつては日本の農村の原風景をなしていたことを思い合わせると、こうした紡織関係の語彙は、綾部という一地域に限局されるものではなく、近代日本を生きた民衆に広く受容される素地を有した、馴染み深い表現だったと考えるべきではなかろうか。

エリアーデの“Cordes et marionnettes”(『Méphistophélès et l'androgynie, Paris: Gallimard, 1962)によれば、宗教的イマージュとしての綱や糸は、洋の東西を問わず、神話的思考様式や超感覚的な体験において主要な役割を担うものであり、そこで宇宙は、原初の織手によって、見えない綱や糸によって結び付けられ織り成されたものとしてイメージされている。本論でとりあげる出口王仁三郎も『霊界物語』において、「霊線」という語で世界に存する見えない糸について語るとともに、自身の宗教的使命を「経糸」に「緯糸」を織り上げる機織りに準えている。

大本教の教説には、経と緯、火と水、巖霊と瑞霊など、対立の契機を含みながらも相互に補完し合う二つの象徴群が存在する。これらを総合して一つに織り上げることが出口王仁三郎に課せられた宗教的使命であったとすれば、これらの象徴群と、数多の紡織関係の言葉にちりばめられた教説とは、果たしてどのような連関をなしていたのだろうか。当時の人々の暮らしぶりを踏まえながら、その点を捉え直すことが本発表の目ざすところであり、それによってこそ、民衆の生きた生活感覚とのつながりのうちに宗教運動としての大本教の一側面が浮かび上がってくるにちがいない。

渡辺榊雄の南方調査

— 馬來軍政監部調査部における —

大澤広嗣 (國學院大學日本文化研究所)

渡辺榊雄(わたなべ・ばいゆう、1893—1978)は、『有部阿毘達磨論の研究』(平凡社、1954年)などの著作で、仏教学史にその名を記している。また『現代日本の宗教』(大東出版社、1950年)などの研究を通して、戦後初期の新宗教研究史にも名前が上がる。しかしながら渡辺が、戦時中に東南アジアの宗教や民族の調査に従事したことは、ほとんど知られていない。本報告では、陸軍司政官として南方調査に従事した渡辺の活動について考察する。

陸軍司政官の就任前の渡辺榊雄は、駒澤大学教授として仏教学を講じていた。曹洞宗僧侶でもある渡辺は、東京帝国大学印度哲学科を経て、1923(大正12)年曹洞宗大学講師となり、1925年の駒澤大学昇格と共に教授へ昇任した。1941(昭和16)年9月に東京帝国大学教授であった仏教学者の宇井伯寿が、駒澤大学学長へ就任したことにより、学内で対立が起きる。宇井らの執行部は、大学の教育改革案を提示するが、旧曹洞宗大学・駒澤大学出身の教職員からは反発が起きた。翌年の1942年2月に宇井は学長を辞職し、同時に大学予科長として宇井体制側にいた渡辺は、学部長の逸見梅栄や専門部歴史地理科長の圭室諦成らと共に大学を辞した。

その後、1942(昭和17)年10月に渡辺榊雄は、陸軍司政官に就任した。司政官とは、戦時中に日本軍が占領した南方の軍政地域にて、行政機構に勤務した文官のことで、『六大新報』(第1994号、1942年)によれば、渡辺は「宗教界から初めての陸軍司政官」とされる。司政官となった渡辺は、南方軍政総監部総務部文教科を経て、馬來軍政監部調査部の民族班長に着任し、日本軍の軍政下にあった旧イギリス領マラヤの宗教や民族の調査研究に従事した。

渡辺の成果は、馬來軍政監部調査部において冊子にまとめられたが、現在では2冊の報告書が確認できる。一冊は『軍政下ニ於ケル宗教政策ノ経過』(1944年)と題され、「昭南神社ト忠霊塔」と「宗教習俗政策ノ経過」で構成される。

もう一冊の表題は『軍政下ニ於ケル宗教習俗ノ利用及指導ノ問題』(1944年)で、構成は「一、馬來諸民族間ニ於ケル宗教ノ滲透」「二、馬來諸宗教ト一神教的立場」「三、宗教及習俗ニ於ケル利用及指導スベキ場面或ハ事項」「四、宗教及習俗ノ利用並ニ指導ノ方法」「五、宗教及習俗ノ利用並ニ指導ノ方向」「六、結び」である。渡辺は同書において、「軍政施行上特ニ問題トスベキハ仏教、回教、印度教、基督教ノ四宗教ナリ」と明言する。

渡辺榊雄が調査したマレー半島南部は、イスラームを信仰するマレー系、仏教・道教の中国系、ヒンドゥー教のインド系住民などが居住する複雑な地域である。日本軍は「民心把握」のため、当該地域の宗教と民族の調査研究を必要とした。渡辺による報告書は、軍政地域における宗教政策に必要な資料として供されたことは明らかであり、仏教学者が従事した南方軍政地域の宗教調査の一事例として、検討すべき課題である。

この近年では様々な学術領域で、戦前日本における学問の歴史が問い直されている。本報告については、従来まで不明な点が多かった軍政下における諸宗教の調査研究の実態解明に、何らかの意義があろう。また本学術大会の開催校である駒澤大学においても、本発表は意味がある。昨今、各大学では大学史の整備が盛んになっているが、報告で触れる宇井伯寿の学長就任に伴う学内対立は、これまで開催校の大学史では積極的に触れられてはいなかった。渡辺榊雄の大学辞職とその周辺を視野に入れることで、開催校の大学史の発掘にも寄与するものと考えられる。

姓名学の誕生

— 産業革命期における異端的実践と「主体」の形成 —

小林康正 (京都文教大学)

報告者の関心は、姓名にかかわる制度や実践を通じて日本近代、さらにはそこでの個人のありようを照射することにあるが、現在、姓名学という異端的な社会实践(知)を主たる対象に研究を進めている。

本報告では、その一環として、姓名学が産業革命期に誕生したという事実をまず確認し、その背後にある社会的認知のマトリックス(処世法・人生観) — 「成功」「煩悶」「修養」「運命」、なかんずく「信用」という用語によって表現された言説空間に生成する — を、資本主義的な市場経済の成立と展開という社会的文脈に置くことで、どのような人々がいかなる状況において何を姓名学に托したのかを示唆したい。

姓名学は、明治30年前後にその姿を明確にした。それは近世の名前占い(反切・名頭相性)を構成要素としながらも、それが同時代のアクチュアルな知として結実・普及するためには、

- ①国家の統治技術である一人一(姓)名制による呼びかけを通じた「国民」の創造
- ②新聞を代表とした活字メディアによる世界の拡大・代替と真正性の変容
- ③立身出世イデオロギーの大衆化による言説空間の変容(「成功」イデオロギー)
- ④資本主義的市場経済の急速な普及と「信用」需要の発生

などの要件が必要であったと考えられる。

姓名学の「開祖」佐々木盛夫(1860-1902?)は、明治前半の下級士族に典型的な「世路」を辿った人物である。彼は立身を目指して上京し、自由民権、実業に身を投じるが、けっきょく挫折する。その原因を姓名に求めた佐々木は、それによって運命を察知する「新式姓名法」を発明する。明治30年代初頭に新聞を宣伝媒体に利用し、姓名判断と改名による運命の開拓を事業化し成功を収めた。姓名学は、近代資本主義の確立の中で失意者の「第二の立身法」(柳田國男)として創造されたのである。

立身出世イデオロギーは明治維新以降の制度や社会状況の変化の中で複雑に変貌しながら、その時代の人生に大きな影響を与えてきた。明治後半には、中等教育の拡大と官途の縮減による大衆化と競争の激化、さらには資本主義の勃興が、立身出世の目標を実業に向けさせ、「成功」ブームを巻き起こす。「成功」指南書が大量に出版され、青年たちの過大な願望を煽るようになる。かつて「成功」を約束するのは個人の奮闘であったが、その可能性の小ささと資本主義的市場経済の急激な拡大の中で、「信用」と「社交」の必要性が説かれるようになる。「信用」は金融・市場経済を促すための必須条件であり、その獲得の戦略として「社交」も要請されたのである。

姓名学が登場したのは、こうした時代であった。姓名学は、自己に適応されるだけでなく、誰が「信用」に足るべき人物であるかを知るための技術としての側面をもっていた。そのため、佐々木自身の経歴は「信用」を社会に流通させるために当時つくられ始めた「信用調査書」に掲載され、もっとも効果的に「信用」を創造する新聞が宣伝の媒体として選ばれたのである。姓名学は他者に対する指向性をもっていた。

本報告では、姓名学という異端的実践がこうした社会の大きな転換とメディアの革新と深いかわりがあることを示し、九星術、易断などの占いや、骨相学・催眠術といった疑似科学などの同時代に流行した異端的実践が、そのような時代に生きた近代的な「主体」によって受容されたことを示唆したい。

なお付带的ではあるが、こうした知見はこれまで「2つの近代化」の一段落期と「霊術系宗教」の流行の関連として指摘されてきた現象に対して再検討のきっかけを与えることも指摘しておきたい。

参考文献 小林康正「日本産業革命期における「運命」言説の位相-石川啄木の生涯を参照系として-」
『京都文教大学人間学部研究報告』第9号(2007.4月刊行予定)。

禁酒運動の宗教思想と近代的自己

— 日本における事例 —

葛西賢太 (宗教情報センター)

禁酒運動は、しばしば時代遅れの宗教的戒律の押しつけと解される。確かにそのような一面はあり、米国における 20 世紀初頭の禁酒法成立の背景には、厳格なキリスト教的価値観が存在する。また日本の禁酒運動の最重要の担い手は、キリスト教婦人矯風会の矢島楯子、救世軍の山室軍平や禁酒同盟の安藤太郎、ライオン歯磨き創立者の小林富次郎など、キリスト教信仰を持つエリートたちであった。

しかし、実際の背景はもう少し複雑であり、禁酒運動は進歩主義的な意識と実践を伴った運動でもあった。日本において禁酒運動のおかれた文脈を検討し、自己の近代化を目指した宗教運動としての諸側面を理解することが、発表の目的である。

日本における社会的な禁酒の試みは、干ばつや疫病に苦しんだ聖武天皇が仏教の不飲酒戒を周囲にも要求したことなど、古くに遡りうる。しかし大規模な禁酒運動のきっかけは、大量の邦人移民が送られたハワイから始まった。日本から渡航した移民たちの飲酒問題を懸念した当時のハワイ総領事安藤太郎が、キリスト教への改宗とほぼ同時期に禁酒し、また禁酒の重要性を他にも説いたのである。運動の担い手にはキリスト教徒だけでなく、椎尾弁匡のような仏教者など、他宗教あるいは信仰を持たない人も含まれていた。彼らは禁酒のみならず禁煙も説き、また未成年者の禁酒・禁煙の法制化、義務教育の法制化に努力するなど、若者の教育環境整備の一環として禁酒運動に取り組んだ。キリスト教婦人矯風会は禁酒運動とあわせ廃娼運動にも力を入れていた。このように、禁酒が社会改革をすすめるための鍵として捉えられていたことに注意したい。またそこに禁酒運動の限界もあった。

なぜ飲酒がとくに問題化されたのか。一つは、大量飲酒者の存在であり、食料となるべき穀物を酒に転化しうるだけの大量生産が可能になったことが背景にある。その一方で、一定限度を超えた酩酊を、個人の自律という理念に反するとみなす価値観の成立があった。昼食時や休憩時の飲酒を許容していた職場が、正確さや安全さを確保するために飲酒を排除していく。二重の意味で、禁酒運動は近代ならではの運動なのである。

発表においては、禁酒運動が当時の日本のなにを問題化していたのか、そこからどのような近代化を目指したのかを確かめよう。特に、禁酒運動が目指した自己——精神および身体の望ましいありかた——への関心が詳しく検討される。それは、自律と健康という言葉に集約される。

日本の禁酒運動について考えるために、米国をはじめとする諸国の禁酒運動について言及、比較する。また、キリスト教における酒に対する両価的な価値観（カトリックの聖餐式など）を検討する。酩酊を戒める記述がたびたび聖書には見られるが、にもかかわらずキリスト教において飲酒は絶対的な悪とはされていなかった点も確認する。これらにより、禁酒運動が目指していた近代的自己の姿が浮き彫りにされる。

沖縄キリスト教と民間の宗教的伝統

— 戦前戦後の資料を中心に —

古澤健太郎 (同志社大学神学研究科)

沖縄のキリスト教は、信仰、社会意識、組織形態などの点においていくつかの独自性を指摘することができる。そのうちの一つは、沖縄独自の文化的背景がキリスト教の土着化に作用し、特色あるキリスト教理解を生み出している、ということである。

戦前戦後を通じ、沖縄のキリスト教は常にある問題と対峙することを迫られてきた。固有の宗教的伝統と、それらが沖縄社会に与える影響の二つがそれである。「ユタ」と呼ばれるシャーマンが強い影響力を持っていた戦前戦後の沖縄で、キリスト教は常にこうした土着の信仰について考えさせられ、程度の差こそあれ数多くの対応を行ってきた。祖先崇拜の根強い社会状況をどう理解し、対処し、行動するべきなのか、極めて多くの対応を取り続けてきたのである。戦後だけを抜き出したとしても、各教派の機関紙では、祖先崇拜やシャーマニズムにいかに対応すべきかを具体的に提示する記事に対し、頻繁に、多くの紙幅が割かれているのである。これら各教派が発行する雑誌の記者が、強い関心をもって宗教的伝統に関する問題と向き合っていたということと、それに加えて、当時の読者がいかに熱心のこれらの記事にあたっていたかということ、うかがい知ることができる。

その一方で、逆に沖縄のキリスト教も沖縄の文化から影響を受けてはいないだろうか。本来ならばシャーマンが行っていたであろう「疫病平癒」などの現世利益祈禱を、キリスト教として担ったことが、沖縄伝道最初期の隆盛に繋がったと述懐されている教派もある。沖縄の民衆に根ざすことを目的としていたならば、民衆に受け入れられやすいように逆に影響を受け、結果としてキリスト教の方からその形態を合わせようと試みたことは大いにありうる。戦前のまだキリスト教が浸透していない時期や、戦後の荒廃した風潮の中であれば、そうした相互影響はなおさら強まったことだろう。事実、沖縄の宗教的伝統に根ざした信仰を持つ沖縄人キリスト者は、教職者、信徒の別にかかわらず多く見られる。しかしながら、こういった固有の文化との関係に見る影響については、いまだ語られていない部分も多い。

無論、宗教的伝統との関係性が、沖縄のキリスト教において、最も大きな懸案であった、という訳では決していない。沖縄民衆、とりわけ農村女性にとって、ユタの問題はすなわち生活の問題であったため差し迫った課題であったことは事実だが、ここで仮定した沖縄独特のキリスト教観は、沖縄キリスト教が持つ豊かな可能性のうちほんの一部分でしかない。一方でやはり、沖縄における宗教的伝統に積極的にアプローチした一面があったことも確かなのであって、沖縄キリスト教の歴史について考察する上で、これを考慮から外す、あるいは関心の程度を低くすることは決して適当ではない。

本発表の目的は、戦前、戦後の沖縄におけるキリスト者の記述を中心に、沖縄のキリスト教とシャーマニズムの関係を考察することにある。研究に当たっては、各教派の機関紙やキリスト教関係者の自伝、著作、証言などを収集し、比較、検討することで考察を進めたい。例えば先述したように、戦後沖縄の各キリスト教教派が発行した機関紙などでは、場合によってはかなりの紙面が土着信仰について割かれていることもあり、精査が必要である。また、各々の記事だけではなく各資料そのものの特徴についても触れる。そのため、土着信仰について扱うことの比較的少ないようなキリスト教関係資料についても、比較考察対象としてこれを取り扱いたい。また必要であれば、キリスト教関係以外の資料で、本発表と関連のあるものからも情報を収集し、沖縄社会全体における宗教的伝統と、外来の宗教であるキリスト教がどのように関わっていたのかについても考察する。

太平洋における独立教会とカーゴカルトの比較研究

— ソロモン諸島クリスチャン・フェローシップ教会の形成と展開 —

石森大知（日本学術振興会）

ソロモン諸島のニュージョージア島にクリスチャン・フェローシップ教会（以下、CFCと略す）という土着発生的な独立教会がある。この教会は、イギリスによる植民地時代に主流派の西洋ミッション教会から分離・独立を果たし、独自の信仰や礼拝様式に基づいて活動をおこなってきた。その特徴として、聖霊憑依をとまなう宗教的熱狂の一方で、非常に現実的な経済活動に従事してきた点があげられる。

CFCは、ニュージョージア島出身のサイラス・エトによって創設された。エトは、メソジスト教会のミッション・スクールで5年間の教育を受けた後で、自らが経験した聖霊憑依や神からの啓示などをおして、「新しい生活」の構築を目指すという運動を開始した。この運動は、エトの出身地があるニュージョージア島の北部で確固たる基盤を築いたのち、第二次世界大戦がもたらした政治的空白に乗じて同島の南部および周辺の島々にまで拡大した。その勢いに脅威を感じたメソジスト教会の宣教団は、「エトの運動は悪霊の仕業である」とする文書を各村落に配布し、エトを煽動罪で逮捕するなどの措置を講じた。やがてエトは、これらの仕打ちをきっかけにし、メソジスト教会から分離することを望み、1966年、植民地政府の承認をもってCFCとして独立を果たした。現在、CFCは、かつて主流派であったメソジスト系の教会に匹敵する存在となっている。

太平洋における宗教運動は、総じて「カーゴカルト」と一括されるとともに、独立教会に発展することはないと論じられてきた。なぜなら、アフリカや中南米の事例とは異なり、太平洋の宗教運動は、基本的に主流派教会から逸脱する動きを生じさせることはなく、その枠内にとどまってきたというのである。しかし、従来の研究者は、カーゴカルトの範疇に収斂させることに拘泥するあまり、それぞれの運動の個別性を軽視してきた可能性は否定できない。同様の傾向は、CFCに関する先行研究にも指摘できる。そこでは、聖霊憑依による宗教的熱狂やそれに関する言動のみがクローズアップされ、それらの事例をもってカーゴカルトに比類すべき運動として語られてきた。その一方で、CFCの組織や制度および独自の諸活動が確立される過程が議論の対象となることは皆無であった。誤解を恐れずにいえば、従来の研究者の興味をひいたのは、CFCのカーゴカルト的な側面だけであり、カーゴカルト的ではない側面は切り捨てられてきたのである。

しかし、CFCとカーゴカルトの共通性をいくら指摘したところで、「CFCとは何か」といった問いに対する有意義な帰結が導かれる保証はない。CFCは70年以上にわたって人々の要求を代弁してきたからこそ存続してきたのであり、その活動内容はカーゴカルトが一時的に人々を熱狂させたものと質的に異なる。CFCは技術的行為でもって世俗的諸問題に対処してきた一方で、カーゴカルトは概して技術的行為に基づく成果よりも明らかに表現的行為が上回ってきた。両者は、歴史的な偶然が関与することも否定できないが、新しい理想社会の実現に向けた方法に相違がみられ、それが運動の構造的安定を生むかどうかの分岐点となったのである。太平洋を舞台として考えたとき、運動が構造化していく歴史的動態のなかにこそ、CFCという事例の独自性やその意義が潜んでいるといえる。

近年の太平洋を対象とした文化人類学的研究においても、依然として、カーゴカルトとの関連で議論を展開する論文が数多く出回っている。それらのすべてを頭ごなしに批判するつもりはないが、カーゴカルトという固定観念をはずして、太平洋の宗教運動や現象（あるいは、太平洋文化そのもの）を見つめ直せば、それぞれの事例のまた違った側面がみえてくるはずである。

神のことばの現地語化とローカリティの生産

— インド・ゴアのキリスト教会を事例に —

松川恭子 (奈良大学社会学部)

本発表では、インド西部ゴア州におけるキリスト教(カトリック)の「土着化」の歴史と第2ヴァチカン公会議(1962~1965年)以降の「現地化」への転換が持つ意味を現地調査で収集したデータから考察する。

ゴアは、1510~1961年の451年間にわたってポルトガル植民地だった。1534年にはゴア教区が設立され、16・17世紀には東方宣教の本拠地としての役割を果たした。ゴア自体でも1560年以降に強制改宗が進められ、キリスト教徒人口が増加した。16世紀半ばまでにポルトガル支配下に入った地域(旧征服地)では、村落の支配層がキリスト教に改宗し、キリスト教を国教と定めていたポルトガル現地政府と友好的な関係を築いた。当初は改宗運動の中でヒンドゥー教寺院が破壊されるなどの暴力的行為があったものの、キリスト教はゴアに深く根を下ろした。

以上のような歴史を持つゴアのキリスト教会は、政治的領域と同様にポルトガルの支配下にあり、植民地主義的体制を有していた。神学校の教育言語はポルトガル語であり、ゴア生まれの聖職者は司教になれなかった。また、ゴア人で叙階を許されて神父となるのは、ポルトガル現地政府と関係の深い高位カースト出身の人々だった。このような植民地主義的ヒエラルキーは、聖職者と一般信者の関係にも反映されていた。聖職者はラテン語を使用し、祭壇に向かってミサを執り行った。つまり、一般信者たちは聖書から神のことばを直接理解することを許されていなかった。ゴア人の中でもエリートにはポルトガル語聖書を読むという方法があったが、現地語コーンクニー語(Konkani)のみを理解する信者たちが神の教えに触れたのは、説教や教理問答の形式を通じてだった。

この植民地主義的ヒエラルキーが崩れるきっかけとなったのが、1961年に起こったゴアのポルトガルからの解放と翌年に始まった第2ヴァチカン公会議における典礼の現地語化促進の決定だった。まず、ポルトガル人の大司教がゴア人の代行司教に取って代われ、1975年に正式にゴア人大司教が誕生した。典礼の現地語、すなわち、コーンクニー語への翻訳が最初に始まったのは聖歌であり、1967年に聖歌集が出版された。聖書の翻訳は、1968年に『新約聖書』の翻訳が4人の神父をメンバーとする典礼委員会の手によって始まり、6年後の1974年に完成した。続いて『旧約聖書』の翻訳が始められ、2002年に作業が終了した。2006年には新旧両聖書を収めた完全版が発行され、ゴア教会の典礼を全て現地語コーンクニー語で行うことが可能になった。典礼委員会は、聖歌集・聖書のほかにゴア州全域の教会に配布する典礼案内のコーンクニー語訳の責務を担っている。ゴア教会には典礼委員会に加え、教会の日曜学校で使用する教材作成を行う公教要理センターがある。

以上の経緯で発表者が注目するのは、以下の2点である。ひとつめは、第2ヴァチカン公会議をきっかけに、ゴア教会は「インド化」せずに「ゴア化」したという点である。ここで重要なのは、ヴァチカン公会議における文化的集団単位が国民国家ではなく、現地語集団にあった点である。ふたつめは、現地語化によって植民地主義的ヒエラルキーが完全に崩れたわけではなかったという点である。結局はローマ教皇を頂点にいただいた、全世界に広がるヒエラルキーにゴア教会も組み入れられている。神のことばが翻訳されるのは、典礼委員会という権威を通じてであり、そこで聖職者が「解放の神学」のような独自の神学的解釈を行うことは難しい。更に、植民地時代にポルトガル語を使用していた高カーストの人々が、現在は英語を使用することで自らの権威を示し、現地語化に抵抗するという動きもみられる。その一方で、一般信者の間では現地語コーンクニー語に象徴される独自の「ゴア文化」について語る人々も一部で増えており、単なる「土着化」では捉えきれない様々な動きが絡み合っていることが分かる。

本発表では、ゴア教会の「現地化」に関わる様々な権力関係を、聖書のコーンクニー語訳に携わった聖職者へのインタビューと末端の小教区教会における人々の意識から明らかにする予定である。この作業により、グローバリゼーションが進む現代社会において宗教がローカル意識(ローカリティ)生産に関わる意味の一端を明らかにできればと考える。

日々をスピリチュアルに生きるということ

— 英国の聖地、グラストンベリーにおけるヒーリングの実践と女神運動を事例として —

河西瑛里子（京都大学大学院人間・環境学研究科）

本研究はスピリチュアリティという宗教的实践を、個人の日常という視点から明らかにしたものである。

これまでの文化人類学や宗教学の研究では、スピリチュアリティを既存の宗教や価値観に対抗する運動と位置づけてきた。そこでは、スピリチュアリティを個人的な実践と捉えていたにもかかわらず、組織的な集団を対象に分析するという矛盾が生じていた。そこで本研究ではミクロ人類学の手法を取り入れ、スピリチュアリティに関心のある人々が多く集う場である、英国グラストンベリーを調査地として、日常生活における個人の実践に注目した。

本研究ではまず、spirit、spiritual、spirituality という言葉について、人々の会話や日常の行動などの具体例から用法を検討した。その結果、何らかの超越的な存在であるグレート・スピリットが、人間のもつふつうのスピリットと直接つながることで、スピリチュアルな状態になり、それを目指すのがスピリチュアリティであるということがわかった。さらに、ふつうのスピリットとグレート・スピリットのつながりを妨げる悪いスピリットの存在も想定されていて、人々は悪いスピリットから身を守るために魔よけを用いていることもわかった。

そのあとに、グラストンベリーという場について考察する。これまでの研究の中でこの町は、キリスト教社会と非主流社会(オルタナティヴ)が対立するかのようには語られてきたが、本調査から信条にかかわらず特別な聖なる場所としてみなされてきたことがわかった。しかし、聖地としての側面は商品化されていて、そのような商品をきっかけに当地を訪れる人も出てきている。本発表では、個人がすでに確立していた信条の探求の場と他者との新しい出会いの場という二面性をあわせもつ、一つの場であることを指摘する。

ついで、スピリチュアルな活動の事例として、ヒーリングと女神運動を取り上げる。ヒーリングと女神運動に注目するのは、グラストンベリーにおいて、日常的にみられるスピリチュアルな活動であり、組織的ではなく、個人の実践を優先する活動だからである。

はじめに、グレート・スピリットからエネルギーを得て、体内のエネルギーのバランスを正常にすることを目的としているヒーリングという非正統療法を紹介する。そして、体系的な療法ではないことが指摘されているヒーリングに「入信」していくヒーラーたちが、様々なヒーリングを組み合わせて、独自のヒーリング体系を創出していく姿を見ていくことで、従来の入信論を問い直すことを試みる。さらに、グラストンベリーという場との関係性も考察する。

続いて、1990年代にグラストンベリーで始まった女神運動(グラストンベリー女神運動)を取り上げ、グラストンベリー女神運動における女神のイメージを考察する。この女神運動に対する男性の関心の高さからは、この運動の提示する女神のイメージが、従来のフェミニズム的な女神運動の提示する力ある女性ではなく、母や平和といったイメージで捉えられていることが伺える。さらに、現在世界で起こっている戦争や飢饉などの状況は、「男性原理」の過剰によって引き起こされているとみなされていて、その解決のためには女神の象徴する「女性原理」が必要だと考えている。

以上のように本発表では、グラストンベリーというスピリチュアルな場に集まる人々の日常に注目することで、集団論によらないスピリチュアリティの実践を分析していく。そして、組織的な拘束を嫌い、個人での実践を尊重するが、他者ともつながりをつくって、緩やかなネットワークの中で暮らしている人々の姿を提示する。彼らにとってのスピリチュアリティとは、既存の宗教や価値観に抵抗する手段というより、調和や穏やかさを目指す自分自身の主体的な生き方なのである。

ラスタファリ運動のグローバル化とジャマイカのラスタ

— 生業の変化を中心に —

神本秀爾 (京都大学大学院人間・環境学研究科)

本発表では、1930年代にジャマイカで出現したラスタファリ運動のグローバル化がジャマイカのラスタファリアン(以下ラスタ)に与えた影響を考察する。ラスタファリ運動とは、植民地下ジャマイカで1930年代に起こった宗教・社会運動であり、1930年にエチオピアで即位した皇帝ハイレ・セラシエの神格化および、父祖の地アフリカへの帰還を要求する運動である。

黒人優越視にもとづく、黒人の側からの「異」人種隔離を志向するラスタファリ運動のイデオロギーは、ポピュラー音楽レゲエと密接に関係しながら、1970年代以降グローバル化を進めた。ラスタの歌うレゲエに内在する「被抑圧者の視点」「周縁からの視点」から社会を糾弾するメッセージ、救世主の再来をたてる預言的なメッセージは世界各地に共感者を生み出し、ラスタの多国籍化・多人種化・多様化が進んだ。従来のラスタファリ研究には、(国内の研究では)①1970年代以降のラスタと経済の関係、②越境先とジャマイカとの間で起きる相互作用への視点が欠如していた。本発表は、ジャマイカのラスタの経済(生業)に注目し、ラスタが一方的にディアスポラ世界からアフリカをまなざす姿でも、越境先で起こる独自の展開でもなく、ジャマイカのラスタが巻き込まれているグローバル化のダイナミズムを記述することで上記2点の先行研究を補足することを目的とする。ラスタの経済活動に焦点をあてることで、運動の発生以降、都市の貧困層を中心に受け継がれてきたラスタファリ運動の現在の側面を明らかにすることを目的とする。そのことで、現世拒否的、千年王国主義的な思想が現実の社会を生きるうえでどのように作用しているのかについて考察する

調査対象は1990年代以降レゲエとの関係が密接なラスタ集団「エチオピア・アフリカ国際会議派」(Ethiopia Africa Black International Congress 以下、会議派)である。同集団は、レゲエのスーパースター、ボブ・マーリーがかつて所属していたイスラエル十二氏族、ナイヤビンギ・オーダーに並ぶ影響力と存在感を示す集団でもあり、コミュニティには、国内外から信者および潜在的信者が訪れている。本発表では以下の3点、レゲエと入信の関係、生業の変化およびコミュニティに起きた変化について考察を加える。

首都キングストンを追われた後、セント・アンドリュー教区の山中で1972年にはじまった共同生活は1994年に創設者エマニュエルの死亡を契機として内部での求心力を失っていった。一方で同時期より活動を本格化した同集団所属のレゲエ・アーティストたちの活躍によってコミュニンの外部では注目を集める存在となり、潜在的信者の数も増加した。この変化について経済活動を中心に分析すると、会議派の信仰の広がりがかつて実現されていた「共産制的」な運営体制が崩壊していくなかで、信者たちが個別に「経済的自立」の方法を模索する必要に直面したことと関係していることが分かる。会議派レゲエ・アーティストの世界的な活躍がはじまり会議派ラスタファリ運動のグローバル化が進んだのも同時期以降の現象だと考えられる。同集団からは1990年代中期以降多くのレゲエ・アーティストが出現しており、現在では日本でも彼らの音源は容易に入手できる。

個別に「経済的自立」を追及せざるを得ない状況のなか、信者間で利己主義が蔓延してしまい、「カリスマ」エマニュエルの言葉は信者の自己正当化の資源ともなっている。コミュニン外での経済活動も増え、かつてエマニュエルを頂点に「生活・労働・儀礼」の場の中心であったコミュニンは、「聖地」としての役割を残すものの脱中心化も進んでいるのが現状である。

イスラーム解放党のカリフ国家樹立闘争と現代中央アジア

原田恭介(同志社大学神学研究科)

アメリカ主導の「テロとの戦争」に象徴されるように、イスラーム主義運動の国際的な伸張に対する警戒は、近年ますます強まっている。こうした中、イスラームを掲げる反体制的な政治運動は、「原理主義者」や「テロリスト」などの言葉に還元され理解される傾向が強い。しかしながら、こうした運動の主張や戦略の内実は当然様々であり、かつ地域社会のコンテクストに強く依存していることはいまでもない。現代の多様なイスラーム主義運動のなかでも、解放党(Hizb ut-Tahrir: 通称「イスラーム解放党」)は、グローバルな活動領域、明晰なイデオロギー、独自で強固な組織体系、などの点においてユニークである。本発表では、解放党の思想・組織について述べた後、近年解放党が勢力拡大に成功した中央アジアの状況を議論する。

パレスチナで1953年に結成された解放党は、西洋諸国に物質的・精神的に侵食され衰退したムスリム共同体を復活させ、カリフ制(単一のカリフを首長とするイスラーム政治体制)国家の樹立とイスラーム法の施行を実現させることを目標に活動している。なかでもカリフ制国家の樹立は、解放党の言説において最も強調される点である。解放党はカリフ制を、「イスラーム的に正しい唯一の支配形態」であるばかりでなく、現代におけるイスラーム世界の諸問題の解決に最も適したシステムである、と考える。カリフ制樹立のプロセスについて解放党は、大衆への「啓蒙活動」を通して、非暴力的だが革命的な手法によって既存の国家権力を奪取する、という独特なプログラムを打ち出している。

現在解放党の活動領域はアラブ世界を超え、その支部は東南アジア、インド亜大陸、旧ソ連諸国、欧米などに広がっている。だがその急進的な主張ゆえ、大半の地域においては合法的な活動は許されていない。アラビア語で書かれた党の基本文献や時事分析などは、活動する地域の言語状況に応じて様々な言語に翻訳されている。また解放党は、インターネットを介したプロパガンダにも積極的である。

解放党の活動の維持・拡大を可能にしたのは、党独自の組織理論である。その基本構造は、党の司令塔である中央指導委員会、現行の国家の領域を統括する地域委員会、主要な都市部に設置される地区委員会、末端の勉強サークル、からなるヒエラルキーである。活動単位は、数人のメンバーから構成される「ハラカ(細胞)」である。この「共産党型」組織論は、解放党がパレスチナで設立された当初に、現地で活動していた世俗主義のナショナリストから影響を受けたものと考えられる。

中央アジア諸国は、ソ連が解体した後、社会の様々な側面で「イスラーム復興現象」が観察された地域である。1990年代の末頃までに、解放党はメンバーの徴募・訓練とイデオロギーの喧伝を強化し、現地で存在感を示すようになった。ウズベキスタンでは解放党に対する大弾圧が起こり、数千人のメンバーが投獄されたとも言われる。解放党に対して相対的に規制の緩いキルギスタンでは、ウズベキスタン以上に解放党の活動が表面化しており、一つの社会問題と認識されている。解放党が中央アジアで一定数の支持者を獲得した原因を説明するためには、現代中央アジアの政治・社会・経済的な諸問題に触れるだけではなく、解放党と中央アジア社会の「相性の良さ」を考察することが求められる。

解放党は現時点では、今後の中央アジア社会の行方を左右するほど広範な影響力は持っていない。しかし解放党は、政治的自由の著しく制限された中央アジア社会においてイデオロギー闘争を一貫して継続しているという点では、最も注目すべき組織の一つであると言えるだろう。

国際比較の視座からの religiosity

— 日本独自の measures の探究 —

真鍋一史 (関西学院大学)

Wolfgang Jagodzinski はドイツと日本で「宗教」は大きく異なるので、同じ「宗教」という用語を使いながら、それは同じものとして議論することができるのであろうかという問題を提起する。真鍋の立場はつぎの点にある。それは、社会科学における比較の意味は何かという問いである。比較は「目的」でなく、「手段」である。目的は、どこまでもある社会「現象」を分析し、解釈し、理解するということである。そのために比較という手段が用いられるのである。

Jagodzinski は、ドイツと日本の宗教について以下のような点を指摘する。

1. ドイツの宗教が排他的(exclusive)であるのに対して、日本の宗教は排他的でない(non-exclusive)。
2. ドイツの宗教がカトリック教会とプロテスタント教会の二つに高度に組織化されている(organized)のに対して、日本の宗教はそれほど組織化されておらず、多くの小さな宗教団体(religious organizations)に分かれている。
3. ドイツの宗教は予測可能性(predictable)が高いのに対して、日本の宗教はそれが低い。

以上のような Jagodzinski の議論に対する真鍋のコメントはつぎのとおりである。たとえば、3 についていえば、日本の諸知見と比較することで、はじめてドイツの宗教現象の予測可能性の高さが主張できることになる。真鍋の考え方からするならば、両国の先行研究の諸知見を比較するということがまさに実証研究の出発点になる。そこに見られる類似点あるいは相異点がつぎの分析の段階への確実な手がかりとなるのである。ドイツの予測可能性の高さに対する、日本の予測可能性の低さということでは、それはドイツ「的」な方法での操作化による予測可能性の低さということであって、日本「的」な方法での操作化が開発されるならば、それによってその予測可能性は高まるということも当然ありうるであろう。むしろそのような日本「的」な方法——具体的にいえば、「信頼性」と「妥当性」の点からして納得のいく宗教現象の観察の指標——の開発こそが、重要な課題となる。

このような問題関心から、「価値観と宗教意識」に焦点を合わせた「全国調査」が企画された。調査設計は以下のとおりである。(1)母集団：全国 20 歳以上の男女、(2)標本数：1,800 人、(3)標本抽出法：層化 2 段無作為抽出法、(4)調査方法：留置記入依頼法、(5)調査時期：平成 19 年 3 月。

ホーリネス系教会に関わる日本人クリスチャンの「宗教性」発達モデルの構成

— 宗教性発達の心理学的研究 —

松島公望 (東京学芸大学大学院)

本発表は、ホーリネス系教会に関わる日本人クリスチャンの「キリスト教における宗教性」(以下、「宗教性」と記す)発達を検討したものである。ホーリネス系教会を対象とする理由として、ホーリネス系教会は、「聖なる神によって聖なる者とされること(回心体験)」を強調することに特色がある。そのため、ホーリネス系教会は、他の教派に比べて個人の情緒的かつ自覚的な回心体験を重視する土壌があり、その信者は個人の信仰を自覚的に意識する傾向が強く、宗教意識を顕在的に捉えやすいと考えたからである。

日本では、宗教性発達を実証的に検討した研究はほとんど行われていないことから(神保,1980;杉山,2004;西脇,2005)、ライフヒストリー法を用いて、ホーリネス系教会に関わる日本人クリスチャンの「宗教性」発達モデルを構成し、詳細なプロセスを明らかにした。ただし、この「宗教性」発達モデルは、作道(1983,1984a,1984b,1986)の宗教的社会化および Glock(1962)、Verbit(1970)の「宗教性：信念、知識、体験、行動、効果(報酬、責任)、共同体」の観点から展開したものであり、それらの観定の範囲内で構成され、明らかにしたものである。

モデル構成にあたっては、まず約2年にわたる面接調査から、7人のZ神学校の神学生の「自らの信仰に関わるエピソード」を聴取した。その面接調査で得られた口述資料と彼らの信仰体験談(文献資料)を活用して、「宗教性」の下位概念との関連から各エピソードを分類した。それを基に7事例の個人史を作成し、個人史からそれぞれの「宗教性」発達プロセスを構成した。7事例の「宗教性」発達プロセスから各局面ごとに共通項を集約し、最終的にホーリネス系教会に関わる日本人クリスチャンにおける「宗教性」発達モデルを構成した。以下、「宗教性」発達のプロセスを示す。

①現実定義(キリスト教会のなかで共有されている現実への見方)との接触→②回心体験(救いの体験)における契機としての聖書(の言葉)→③(回心体験前の)気づき体験→④回心体験(救いの体験)・信念→⑤回心体験(救いの体験)における確証としての聖書(の言葉)→⑥洗礼を受ける→⑦現実定義の内化→⑧(高次の回心体験前の)気づき体験→⑨高次の回心体験(きよめの体験)・信念→⑩高次の回心体験(きよめの体験)における確証としての聖書(の言葉)→⑪(高次の回心体験後の)気づき体験→⑫深いキリスト教理解へ→[⑬-1 現実定義を代表し、表現する存在になる・⑬-2(現実定義の)自我の中心領域への定着]→⑭(⑬局面後の)気づき体験→⑮「宗教性」の深まりと「宗教性」に基づく態度・実践

さらに、構成した「宗教性」発達モデルに関する『サンプリング(対象者選択)の問題』および『「宗教性」発達モデルの信頼性、妥当性』について検討した。その結果、モデルの信頼性、妥当性については概ね高いことが示されたが、サンプリングについては全ての要件が満たされているとはいえなかった。

当日の発表では、構成した「宗教性」発達モデルを図示し、モデルの作成過程およびモデルの信頼性、妥当性について具体的に述べたいと考えている。

※本発表は、2001年度横浜国立大学修士論文および日本宗教学会第61回学術大会研究発表(2002)したものを、2006年度東京学芸大学博士論文の一部として加筆修正を行ったものである。

日本現代都市社会における民衆宗教性と消費行為

— とげぬき地蔵の事例 —

デラコルダ・ティンカ（筑波大学人文社会科学研究所）

本論のテーマは、宗教と消費との関係に存在するジレンマについての研究である。西欧社会では、消費文化が宗教に取って代わり宗教を衰退させる原因となったと考えられている。これに対し日本社会では、宗教と文化行為が互いを排除しようとするのではなく、常に互いに密接な関係を築いてきた。近代的都市の消費社会において宗教が持続できた理由は、様々な宗教的儀礼の選択肢があるだけでなく、宗教と消費の共生関係のためであると私は仮定した。この仮説を検証するために、私は東京都豊島区巣鴨にある高岩寺（とげぬき地蔵）の調査をおこなった。ここを選択した理由は、民衆宗教性と消費文化が混在しており、両者の関係を調査するために適していると考えられるためである。

過去にも調査がおこなわれているが、それらは社会人類学的な視点が中心であり、宗教性と消費の関係に関しては注意が向けられていなかった。私は実際にとげぬき地蔵に行き、参与観察と聞き取り調査をおこなった。この調査の目的は、とげぬき地蔵に多くの参詣者が訪れる理由を分析し、民衆宗教性と消費の相互依存性を明らかにすることであった。聞き取り調査の結果は、巣鴨にきた目的によって3つに大別される。「参拝のため」、「買い物のため」、「両方のため」という目的にわかれ、参拝や買い物のためと答えた人々は具体的な目的をもっている傾向がある。しかし、参拝と買い物の両方が目的と答えた人は、巣鴨が高齢者に適した場所であり落ち着く、など抽象的な理由を述べている。この3番目の目的で来た人々はむしろ多数派であり、彼らが述べた巣鴨の長所が人々を集める要因になっているようである。買い物、雰囲気、巣鴨に高齢者が集まるための重要な要素であろうといえる。

巣鴨での人々の行動を分析すると、とげぬき地蔵への参詣よりもむしろ商店街での買い物に重点が置かれていることがわかる。また巣鴨の参詣者は、浅草寺や柴又の帝釈天と比べると、それよりも内部の共通性を多くもつ社会的集団であることに注目できる。年齢層はよく取り上げられる特徴であるが、参詣の頻繁さにおいても他の観光的な寺社と異なっている。高齢者向けの巣鴨の商品は、巣鴨を訪れる高齢者のアイデンティティを形成していると考えられる。つまり、巣鴨での消費を通じて高齢者としてのアイデンティティを確認できるのである。

消費論に関する文化人類学的な研究によると、買い物とはさまざまな商品の中からただ選択するというだけでなく、自分が所属したい文化を示す商品を選択するという行為だとされる。何かを選択するという意味で、排他的社会的行為ともいわれ、その行為によってアイデンティティを形成しうる。この理論にもとづけば、巣鴨で買い物をする高齢者たちは互いに知らなくても、同様な商品を買うことで共通の諸特徴（個人的趣味、関心）を共有しているコミュニティのメンバーであると自覚できる。このようなコミュニティは「想像の共同体」と呼ばれるが、とげぬき地蔵という象徴がなく、買い物のみであればコミュニティとして成立しないであろう。すなわち、とげぬき地蔵のご利益やノスタルジーが商店街の商品に象徴的付加価値を与えられ、しかも、縁日という祭礼は人々に非日常的感覚を与えるため、縁日での消費は特に空想的空間を作り出している。

人々が宗教的儀礼を消費的に選択する傾向はあるとされる。西洋の場合ではコミュニティからはずれた個人が商品と同様に宗教も自律的に消費するため、宗教を衰退させると考えられている。近代都市社会の日本において宗教的儀礼は消費文化に影響され、直接的なご利益を求められる傾向にある。しかし、消費行為は宗教的儀礼が頻繁に実践されるような共同体の文脈を形成するため、消費は宗教をむしろ強調する機能を果たすと考えられる。

レヴィ-ストロースと一神教

— 西洋社会の神話なき「構造」？ —

尾上正人(奈良大学)

本報告の表題は、フロイト最晩年の問題作『人間モーセと一神教』(1939年)に因んでもいる。フロイトは、夢判断のヒントが「創世紀」のヨセフの夢解きの逸話に由来するとも言われるように、その独創的な精神分析学の展開において聖書学の成果を多く取り入れていた。それに対して、彼の無意識概念に強い影響を受け、民族的背景も同じくしているはずのレヴィ-ストロースには、一神教が作り出した世界像に対する言及や分析がほとんど存在しない。これには彼自身の無信仰の立場も関係しているとは思われるが、しかしそれにしても、親族構造の分析と並んで神話分析が中心に据えられたところの、構造主義と呼び習わされた彼の学問体系において、西洋社会を形成した屋台骨の1つである一神教が分析の俎上に載らないのは不自然ではあり、意図的な忌避のようにすら見える。彼が、かつて自ら踏査した南米諸民族の神話との対比で好んで引用してきたのは、古代ギリシアのオイディプス神話やケルトの神話であり、これらは西洋社会がキリスト教化される以前に存在した多神教的世界像に根ざすものであった。レヴィ-ストロースは現代を「神話解体の時代」と捉え、神話がかつて持った「静的・統合的」な見方に代わって「歴史」というものが、「動的・分裂的」な見方を提供するようになったとも述べている。しかし人類の世界像の中に彼の言うこの「歴史」を持ち込んだのは、ほかならぬ一神教であって、彼がかつて定式化した「冷たい社会」から「熱い社会」への移行は、彼が強調する近代の機械文明の成立云々以前に、少なくとも数千年にわたる一神教の時代を媒介としてこそ成し遂げられたはずなのではあるまいか。

さてしかし、一神教に神話は存在するのであろうか、あるいは神話と両立し得るのであろうか。一方で純粹に論理的に考えれば、存在しない(両立し得ない)と言える。なぜなら、神話が、複数の神々が人間同様に「社会」を形成してそこで格闘・協調・恋愛・嫉妬等々の行為をなすことで織り成す物語であるとすれば、たった1個の創造神が人間を始めとする被造物と対峙するだけの世界像に、神話の入り込む余地はないからである。むしろ、ヘーゲルとマルクスの図式が雄弁に語るように、創造神の意図と行為を唯一の動因とする世界の移り行きは全くもって此岸的であって、上で述べた「歴史」そのものである。しかし他方で、論理的にではなく歴史的に考えれば、一神教的世界像は多神教的なそれと無関係ないし対立的に存在してきたのではなく、むしろ相互浸透が基調であったのであり、その意味で多神教が有してきた神話と無縁ではない。洪水伝説は古代オリエント世界からの拝借物であったし、バビロン捕囚以前のヤハウエ信仰は、バアル神など他のいくつかの民族的な神々の中から選択される「拝一神教」にすぎなかった。また、フロイトも強調したように、パウロ以降のキリスト教は子・聖霊(さらには聖母)などを措定したことによって地中海世界の多神教的要素を取り込んだし、それを批判したイスラームにも天使などの形で同じ傾向が伏在している。第3に、レヴィ-ストロースは神話の特徴の1つに「事物がなぜ現在の姿であるかを述べる」ことを挙げていたが、この特徴のみによって定義される物語を仮にメタ神話と名づけるとすれば、一神教が作り出した「歴史」的・此岸的な世界像(さらには近代科学)も、これに含めることができなくはない。以上の3点からして、一神教は狭義の神話と相容れない要素を持ち、むしろ人類の世界像の脱神話化=「歴史」化の原動力ではあったのだが、しかしレヴィ-ストロースが多神教的世界像に対してのみ行なった神話分析を一神教に全く適用することができないと言い切れない面がある。一神教の神話分析は、単にレヴィ-ストロースのルーツ解明(神話分析者の分析)だけでなく、神話を持たないとされる西洋社会の「無意識の構造」解明にも資する部分があるはずである。

「隠喩としての宗教」序説

林貴啓 (立命館大学)

「オタクの聖地」「ダイエット信仰」「カリスマ美容師」—こういったものの言い方は、今日でも日常会話やマスメディアなどで、私たちも至るところで目にし、耳にしているはずである。このように本来「宗教」の領域に属する言葉が世俗的な事柄を表す隠喩として用いられることは、実にしばしば見受けられる事態である。本発表は、そうした「隠喩としての宗教」という現象に着目し、これを理解するための一つの視座を築こうとする試みである。

隠喩はしばしば宗教との関連で論じられてきた。P. リクールの研究に代表されるように、自然的・世俗的な事象が宗教体験や境地を表現するための隠喩あるいは象徴となることは、これまででも考察が積み重ねられてきた。容易に語りえない事柄を言い表すために、通常の字義的な言語とは異なる言語が利用されるわけである。だが逆のケースはあまり注目されていない。宗教のほうがむしろ隠喩として利用される現象である。この現象に着目することで、新たに開かれる展望は少なくない。

上に挙げたように、「隠喩としての宗教」はこの日本でも幅広く流通している。自覚的な信仰を有する人々がますます少数派となり、宗教が社会の周縁に追いやられつつあるこの日本社会にあって、宗教用語の隠喩的な用法だけが独り歩きしているのは不思議な事態といえる。隠喩のなかには宗教的なものが生き続けており、「無宗教」を自認する人々にも出会われている、とも解釈できる。これがもともとの宗教を理解する道筋となる、という可能性も期待できよう。また一面では、隠喩の用法を探ることで、この社会において浸透している宗教に対するまなざしを析出する、という考察も可能になる。S. ソンタグが病の隠喩的な用法のうちに、当該の社会の特定の病に対するまなざしを見てとったのと相通ずる視点である。

こうした宗教用語の隠喩的用法を理解するための理論的なベースとして、本発表では先に挙げたリクールの隠喩論・宗教象徴論に加えて、近年の認知言語学・意味論の知見も援用する。その要点は、「言語表現としてのメタファー」から「認識・思考の構造としてのメタファー」へ、という視点の転換である。「時は金なり」「人生は旅である」といった隠喩は、「金銭」「旅」という枠組みを通して「時間」や「人生」を理解する見方に対応している。この見地に立つと、宗教(的なもの)が隠喩的に使用される際には、一つの認識の枠組みとして機能している、という事実が明らかになる。「世俗的な物事が、宗教を通して理解される」ということが成り立っているのである。

ここで「認識の枠組み」となっている宗教とはどのようなものか。それを通じた認識とは、いかなる理解の仕方を示しているのか。その効果は何か。どのような文脈で用いられるものなのか—こうした問題をまず理論的な見地から整理してゆく。これを踏まえて、いくつかの典型的な「隠喩としての宗教」の事例について、類型化を行なったうえで分析を加えてゆく。今回は序説的な考察にとどまるとはいえ、より広範にわたる「隠喩としての宗教」の実証的研究につないでゆくための、基本的な視座を確立することに努めたい。

コーディネートの力

— 世俗的（非宗派的）宗教コーディネーターの台頭と現代日本の宗教変動 —

對馬路人（関西学院大学社会学部）

本報告は現代日本の宗教変動、とりわけ制度宗教と人々のかかわりやその変化について理解を深めようとする場合、制度宗教と人々の間を仲介するエージェントとして「世俗的（非宗派的）宗教コーディネーター」という概念を導入することが一定程度の有効性を持つのではないかとすることを主張しようとするものである。

これまで日本の制度宗教のあり方の変容については、近代化、都市化、核家族化といった社会変動との関係で、在来の檀家制度や氏子組織のといった制度的基盤の揺らぎ、それによる「宗教浮動人口」の大量発生といった状況変化が指摘されてきた。あるいは人々の宗教とのかかわりに関しては、新霊性運動の隆盛などを背景に、宗教の個人化、「自分宗教化」の進展といった事態が論じられてきた。いずれにしても制度宗教や組織宗教の束縛からの人々の解放と個々人の信仰の拡散が進展するという方向での変化が強調されている。

しかし果たして現代日本の宗教の宗教変動の方向や内実を宗教（信仰）の非制度化、脱組織化という一面的な見方で十分に捉えられるのだろうか。たとえば、日本人の慣習的宗教行動と深く関わる冠婚葬祭についていえば、むしろそれに関わる業界では組織の大規模化や寡占化に向かう傾向が顕著である。あるいは四国遍路ブームに見られるような一定の宗教行動の流行的な盛り上がり現象もしばしば見られる。百花繚乱の如く咲き乱れているかに見える「癒し」や「スピリチュアリティ」の世界であるが、それらに関する情報はしばしばカタログ的に編集されて提供されたり、見本的に集合展示されて提示されている。個々人の宗教行動や信仰がそれまでの固定化された束縛から解放されつつあるのは事実であるが、それがむしろ新たなエージェントによる新たな組織化の動きを活性化させているという側面を見落としてはならないだろう。

そうした新たな組織化に関わる新しいエージェントの中で、近年その社会的存在意義を増してきているものがここで取り上げる「世俗的（非宗派的）宗教コーディネーター」である。「世俗的（非宗派的）」と形容した意味は、それ自身が宗教団体のように直に人々に救済財を提供するエージェントではないことを示すためである。「宗教コーディネーター」と呼ぶのは、そのエージェントが、宗教と人々の間に介在し、両者の仲介、調整、連携役を担うことを活動の中心に置いていて、いわば宗教のコーディネート役ともいえる存在だからである。更には、それらが近年その社会的影響力を拡大しているのは、その卓越したコーディネート能力によると考えられるからである。

具体的にいうと、冠婚葬祭のイベント業者や霊園業者、参詣や巡礼に関わる交通・旅行業者、宗教情報の編集や発信に関わるメディア産業、宗教・癒し・精神世界・占いなどに関わるカルチャー・スクールやイベント・プロデュース業などがそれに相当する。

これらは人々が宗教に関わる際のチャンネルや場を提供しているに過ぎず、宗教団体からすると本来的にはその活動を補佐する従属的エージェントに過ぎない。しかし檀家制度、氏子組織、講集団など、これまで宗教と人々を媒介してきたチャンネルが弱体化しつつある今日、宗教団体が人々の信仰や宗教行動をひきつけ、つなぎ止めるにあたって、これらのエージェントのコーディネート力に依存する度合いがますます高まっている。両者の力関係のバランスは今や大きく変化しつつある。

これらのエージェントの動向は、単に日本宗教の組織化のあり方を変えるだけではない。これらのエージェントは人々の宗教的需要の動向に敏感である。それは多くの場合に営利企業として活動しているために、人々の需要に積極的に対応しなければならない。しかもそれ自身世俗的エージェントであるから宗派の原則に拘束されないからである。しかしそれ自身は宗教団体でないので自ら新たな救済財そのものを作り出すことは困難である。そこでこれらのエージェントはしばしば宗教団体の提供する救済財を独自の仕方編集し、アレンジ

することを通して、人々の宗教的需要に応えようとする。こうしてこれらのエージェントは新たな民間信仰、民俗宗教の成立を促しさえする。

報告では、「世俗的（非宗派的）宗教コーディネーター」の台頭現象やそれがもたらす日本の宗教状況への影響について、いくつかの具体的事例を挙げて説明し、現代日本の宗教変動の理解にとってこれらのエージェントへの考察がどのような貢献ができるかを論じたい。

●発表要旨 テーマ・セッション

テーマ・セッション A会場 1-202 教場 10日(日) 9:30-12:30

宗教社会学における調査研究の課題と実践

— 秋庭裕・川端亮『霊能のリアリティへ』(2004)¹

芳賀学・菊池裕生『仏のまなざし、読みかえられる自己』(2006)²書評セッション —

司会者	樫尾直樹 (慶應義塾大学) 弓山達也 (大正大学)
コーディネーター	黒崎浩行 (国学院大学)
自著紹介	秋庭裕 (大阪府立大学) 川端亮 (大阪大学) 芳賀学 (上智大学) 菊池裕生 (盛岡医療福祉専門学校)
評者	伊藤雅之 (愛知学院大学) 櫻井義秀 (北海道大学) 塚田穂高 (東京大学大学院)

セッション要旨

仏教系新宗教「真如苑」を対象とする、10 数年にわたる調査をふまえた、かなりボリュームある宗教社会学研究書が、あいついで二冊刊行された。

両著は、同一の宗教団体を研究対象としているが、その着目点や方法論は異なっている。この点において、本セッションにおける有意義な議論の格好の素材となると考えられる。

秋庭・川端の研究は、宗教理解の困難さをふまえた上で、真如苑独特の「霊能」理解に焦点をおいている。「開かれた濃密な記述」による教団史の再構成、インタビューと統計的手法の併用によって「回心プロセス」を鳥瞰図化し記述するという、新しい方法論を採ることで困難な対象を理解しようとする試みである。

他方、芳賀・菊池の研究は、信徒の「回心」を引き出すための教化活動である、青年部弁論大会に着目している。社会構成主義的立場による詳細な記述と分析により、弁士および弁士を指導する教化委員にとっての「回心」を、自己物語再編のプロセスとして描き出し、そこでの多様な社会的コンテクストを析出する。とりわけ、真如苑特有のものとして「仏のまなざし」を指摘し、さらに弁論大会活動の 1990 年代後半の社会変化との関連にも考察を進めている。

セッションでは両著を同時にとりあげ、対象を同じくしながら、アプローチの違いが、それぞれどのような点を明らかにすることに成功し、そして、一方では、不足・欠落しているのかという点を検討する。

教団研究として、回心研究として、あるいは、物語論として、質的な社会調査研究として、さまざまな角度から議論を行って、今日の宗教社会学における、調査研究の到達点を確かめるとともに、今後、私たちが取り組まなければならない課題を展望していこう。

セッションでは、まず、著者自らが著書の概要を紹介し、その後に評者からの論点提示と批評、それに対する著者からのリプライ、フロアからの質疑応答という形式で進める。

両著に目を通して参加してもらえれば、より有益であろうと思われるが、未読の参加者にも刺激的で知的興奮に満ちたセッションとなるような運営を企図している。

¹ 秋庭裕・川端亮『霊能のリアリティへ ― 社会学、真如苑に入る』新曜社、2004年。

² 芳賀学・菊池裕生『仏のまなざし、読みかえられる自己 ― 回心のミクロ社会学』ハーベスト社、2006年。

ツーリズム・聖地・巡礼

司会者・コーディネーター 山中弘

発表者・発表題目

- ① 今井信治 (筑波大学大学院)
表象される聖地 — オタクと聖地巡礼 —
- ② 山中弘 (筑波大学)
「場所」の聖化とツーリズム — 長崎カトリック教会群の世界遺産化を事例として —
- ③ 浅川泰宏 (明治大学)
創出される表象空間 — 遍路道再生運動の事例から —
- ④ 寺戸淳子 (専修大学)
「異邦」の魅力
- ⑤ 真鍋祐子 (東京大学)
中国観光に投影されたナショナル・アイデンティティ — 韓国人による「聖地」への帰郷 —

コメンテーター 橋本和也 (京都文教大学)

セッション要旨

人類学、社会学が1970年代後半あたりからツーリズムを積極的に取り上げ始めたように、宗教研究の領域でも、ツーリズムを論じようという動きがでてきている。その背景には、毎年2億四千万ともいわれる膨大な数の巡礼者の存在や、世界遺産に指定された宗教施設などを訪れるヘリテイジ・ツーリズムの流行も大いに関係しているように思われる。

このパネルも遅まきながらこの動向に棹さすものであるが、先行する人類学的、社会学的ツーリズムに関する研究動向を眺めると、ツーリズムそのものも持っている宗教的次元を論じるという研究が目をひく。しかし、ツーリズムの論じ方は、これ以外にもいろいろと考えられるだろう。このパネルの一つの大きな目的も、様々な立場からツーリズムと宗教との係わりを論じる可能性を探ってみようというものであるが、ここでは、それを「特定の場所」との係わりで論じてみようと考えている。このパネルで取り上げられる、四国八十八ヶ所の札所、フランスのルルド、長崎カトリック教会群など、それらは、信仰者たちにとって特別な場所であり、宗教的な聖地ということになる。しかし、特定の信仰をもつ者にとってのみ聖地は存在するのではない。韓国檀君神話の舞台白頭山、上海大韓民国臨時政府旧址は、多くの韓国人にとって自らの民族的アイデンティティを象徴する場所であり、いわばナショナリズムの聖地といえる。さらに、エルヴィス・プレスリーの邸宅や秋葉原なども、今日、「聖地」と呼ばれたりもする。

聖地のこうした多義性は、今日の巡礼の在り方の多様性にもそのままつながってくる。現代の巡礼実践は、聖地—宗教的巡礼者という静的で単一的な分析モデルでは収まりきれない、多様なエージェント群を考えてみなければならないだろう。ツーリズムを、特定の場所が訪れるに値するという観念を中心に編成された行為とすれば、そうした場所に仕立て上げるのは、単なる信仰や宗教体験だと簡単にはいえないように思われるのである。もとより、何も無いところに聖地は出現しない。そこには、その場所に埋め込まれた「歴史的記憶」が不可欠であるかもしれない。しかし、この記憶すらも、ツーリズムの背景にある消費の欲望のなかで、次々に作り出されているともいえよう。聖地や巡礼が巨大な資本が投入されるツーリズム産業のなかに巻き込まれて

世俗化しているにすぎなのか、それとも、ツーリズム、聖地、巡礼の三者がダイナミックに相互的に交渉しながら、人々のアイデンティティの構築、ナショナリズムへの動員を促しているのだろうか。聖地・巡礼といういわば伝統的な宗教研究のテーマをツーリズムというすぐれて今日的な問題に接続させることで、現代社会における宗教の布置の変動を理解する新たな地平が開けるかもしれない。このパネルでは、ツーリズム・聖地・巡礼を巡る営みを様々な角度から論じることで、どのような問題系がそこから析出されていくのかを議論するなかで、宗教研究というコンテキストにおけるツーリズムを検討する足がかりを模索してみたいと考えている。

映像宗教学の射程

コーディネーター 新井一寛 (大阪市立大学都市文化研究センター)

発表者・発表題目

- ① 岩谷洋史 (神戸学院大学 地域研究センター)
ファインダーを通じた「宗教的」空間の再構成 — 「茅の輪くぐり」を題材として —
- ② 南出和余 (京都大学地域研究統合情報センター)
宗教儀礼におけるカメラと撮影者の存在 — バングラデシュの割礼映像を事例に —
- ③ 新井一寛 (大阪市立大学都市文化研究センター)
タリーカ (スーフィー教団) の自画像に見るポリティクス
— 現代エジプトにおけるジャーズリーヤ・シャズビリーヤ教団の事例を通じて —
- ④ 岩谷彩子 (龍谷大学アフラシア平和開発研究センター)
映像の呪術性 — 南インドの事例より —
- ⑤ 小田マサノリ (中央大学)
グローバリズム時代の大量消費社会における「新たな宗教」に抗する「儀式的抵抗」活動とその記録映像をめぐる予備的な一考察
— 英国ヴァキュームクリーナーのアクティヴィストたちによるホイールマートとショッピングモール礼拝のプロモーションビデオを事例として —

コメンテーター 田中雅一 (京都大学人文学研究所)

藤原敏史 (ドキュメンタリー映像作家)

セッション要旨

昨今、映像機器や編集機材の利便化により、映像を活用した研究が活発になっており、注目を集めている。本パネルはこうしたムーブメントのなかで、宗教研究においてどのように映像を活用できるのかについて議論する試みである。各発表者は、実際に映像を活用したプレゼンテーションを行う。また、昨今の映像ムーブメントでは、映画監督や映像ドキュメンタリー作家などとの活発な交流や共同作業が行われている。本発表でも、コメンテーターとして、研究者の他に映像のプロフェッショナルであるドキュメンタリー作家を招致した。

本パネルに含まれる5つの発表には、映像を通じた宗教性の反照的把握、映像による宗教の分析的再構成、撮影時のカメラの存在が生む問題、映像にみる宗教実践者の自画像のポリティクス、映像自体が有する呪術性の問題、消費文化に抗する活動家による宗教儀礼と映像の戦略的活用などの内容が含まれている。このように、各発表の内容はバラエティーに富んでいる。また発表題目に見られるように、様々な地域の宗教現象を対象としている。そのため、各発表者の問題関心は、一見バラバラのように見えるであろう。しかし、発表者の意図に関わらず、各発表に通底する問題として浮かび上がってくるのは、映像で宗教を扱うことの可能性と限界についてであろう。さらに、発表者による撮影・編集・上映行為、あるいは映像の資料的・分析的・表現的活用実践を反照的に再考することを通じた、「宗教」概念の再考といった可能性も浮かび上がってくるかもしれない。

仏教ルネッサンスの向こう側

— ラディカルな現代仏教批判 —

司会者・企画者 川橋範子 (名古屋工業大学)
熊本英人 (駒澤大学)

発表者・発表題目

- ① 川橋範子 (名古屋工業大学)
ジェンダー平等 — 仏教の理想と現実 —
- ② 根本治子 (花園大学)
ビハーラ活動の問題点 — 介護と宗教者 —
- ③ 大谷栄一 (南山宗教文化研究所)
仏教の平和運動 — 歴史認識のポリティクス —
- ④ 熊本英人 (駒澤大学)
僧侶とは何者か — 現代における戒律の意味 —

コメンテーター 福島栄寿 (札幌大谷大学)
三土修平 (東京理科大学)

セッション要旨

現代日本の社会には、宗教への漠然とした期待がみられる。仏教においては、寺院を核としたコミュニティへの期待や、精神世界への羨望というような、いくつかのムーブメントが現れている。しかし、残念ながら、仏教教団や僧侶たちはそうした動きに一喜一憂することを繰り返すのみで、せつかくの仏教ブームも、仏教とそれが存在する社会の本質的な改革とはなり得ていない。時勢に即応した運動のみがルネッサンスなのではない。

本セッションでは、うわついた一過性のブームに流されず、よりラディカルな問いかけをすることにより、あらためて仏教再生とは何かを探求し、仏教と社会とのより健全で望ましい関係を考察しようとするものである。

仏教界の現実に目を向けたとき、そこにはこれまで看過されてきたいくつもの問題がある。

たとえば、仏教教団の男女共同参画、介護、医療現場での仏教理念実現の実践、戦後の仏教の平和運動など、仏教の社会参加が最近注目を集めているが、そこにどのような問題が隠されているか。さらに、その担い手である僧侶たちは、特に近代以降、一般社会の家父長制と性別役割分担をその基盤とし、出家主義と在俗生活という矛盾を抱えることになった。しかも実際には、教理よりも教団運営がその中心であり、出家の理念を支える戒律は権威として象徴的に使われるだけで、厳格に守られることはない。これらの二面性は、教団内の女性差別、すなわち、寺族と呼ばれる出家僧侶の配偶者の不可視化や、戒律主義を唱える男性僧侶の女性(女性僧侶も含めた)軽視、女性僧侶の女性蔑視へとつながる。こうした傾向は、仏教教団での人権問題の硬直化した語りかたにもみられ、仏教の社会参加に制約を与えているともいえる。

このような歴史と構造を明らかにしてはじめて仏教は閉塞感から脱却して再生へと向かうことが可能となるのであり、広い視野から仏教の現実を直視した上での問いかけこそが仏教再生にとって最も重要なのである。それはまた、仏教教団の成立要素である聖職者＝出家が如何に定義づけられるか、如何にあるべきか、ということでもある。過去の歴史を無視した自己満足や自己正当化に陥るのではなく、伝統の継承と改革の両面から仏教再生をすることができるのはどのような人か、ということが問われているのである。

これらの問題提起によって、仏教を学ぶ者、信じる者、実践する者の主体が浮き彫りにされることになるろう。

「宗教と社会」学会第15回学術大会プログラム

製作

「宗教と社会」学会第15回学術大会事務局

〒154-8525 東京都世田谷区駒沢 1-23-1

駒澤大学総合教育研究部 文化学部門内

「宗教と社会」学会第15回学術大会事務局

e-mail: jasrs2007@komazawa-u.ac.jp

電話 03-3418-9321

大会ホームページ <http://homepage2.nifty.com/jasrs2007/>

編集

池上良正（駒澤大学総合教育研究部）

矢野秀武（駒澤大学総合教育研究部）

相澤秀生（駒澤大学大学院）

700部印刷

2007年4月25日